

## 編集後記

全学共通カリキュラムが導入されてから、10年の歳月が経過した。「特集『全カリ10年』を振り返る」では、1991年の大学設置基準の大綱化を受けて、97年4月に全学共通カリキュラムを誕生させた本学の取り組みが明らかにされている。97年に導入された総合教育科目と言語教育科目よりなるプログラムは、その後2001年度の改革により、総合教育科目に「立教科目」と「時事科目」を加えた。さらに2006年の改革により、「立教生の学び方」というカテゴリーの科目が加えられ、総合A科目の区分けが精緻化され、また「立教科目」はより多彩な内容となった。2005年度にはその「立教科目」が、文科省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」として採択された。また「立教科目」のテーマと密接に関連する総合B科目においても、参加型学習ならびに体験学習の授業プログラムが受講生に評価されていることは、本誌の「特色ある大学教育支援プログラム 採択記念シンポジウムⅡ」からうかがうことができる。

他方でこの10年は、私たちの全学共通カリキュラムへの関心や思いに少しずつ変化をもたらしたことを、上記の「特集『全カリ10年』を振り返る」は指摘する。内外で教養教育に対する認識が変化し、全カリが創生期から円熟期へ移行するにつれて、関係者の関心が低下してきていることが示唆されている。全カリと学部専門教育の双方の運営に関わることは、教員にとってそれなりのエネルギーを必要とする。教員の関心の低下は、自らの負担感の増大にしばしば結びつく。

2006年度からの全カリ第2ステージと新組織検討委員会の答申を受けて、2008年度には新学部新学科の設置が予定されている。これに伴い、教員の全カリ運営への関わり方にも変化が起こってくる。ただし、上述した「負担感」の問題は、おそらく簡単には解決されないであろう。むしろ全学の教員で全カリを担う以上は、そこにさまざまな関心や可能性を見出そうとする方が、間違いなく作業を実りあるものとする。全カリと専門教育の双方に関わることは、立教大学のカリキュラムの全体像を考えながら、専門教育を位置づけるための貴重な機会でもある。お寄せいただいた原稿を拝読しながら、心地よい「負担感」にするための様々なヒントをいただいた編者である。

弘末 雅士（ひろすえ まさし）  
本学文学部教授